

第4節 持続可能な社会を支える人づくり

〈主な指標と最新実績〉

動く環境教室受講者数	2,283人
環境アドバイザー登録者数	306人
森林環境教育参加者数（県主催）	2,726人
森林環境教育指導者数	125人

第1項 環境学習の推進

1 動く環境教室の推進 【環境政策課】

「動く環境教室」は、環境学習に必要な機材を搭載した移動環境学習車「エコムーブ号」と、県が育成した環境学習サポーター（講師）が小中学校等に出向き、水、ごみ・リサイクル、大気、温暖化のテーマに、実験や体験活動を交えながらわかりやすく環境について学ぶことができます。

実験では、地球温暖化をはじめ、水の汚れ、大気の汚れなどを調べたり、リサイクルに関する教材でごみの分別を体験しています。

この授業を子どもたちが受けることにより、自分たちの生活と環境問題のつながりを意識し、普段の生活から環境にやさしい行動をしようとする気持ちを育みます。

2021（令和3）年度は、伊勢崎市環境フェスティバルにも出展しました。

表2-2-4-1 動く環境教室開催状況

年度	H29	H30	R元	R2	R3
件数	87	87	94	59	45
人数	6,293	5,383	7,411	3,182	2,283



動く環境教室の様子

2 環境学習サポーターの育成 【環境政策課】

環境学習サポーターは主に「動く環境教室」において講師を務めます。

「動く環境教室」の幅広い学習分野の知識を習得するための座学や、子どもたちの興味を引きつける話し方、学習の流れを踏まえた実験の仕方など、体験的な学習を行動へ結びつけさせるための研修を行っています。

また、「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」において、「動く環境教室」の実習をカリキュラムに組み込み、環境学習サポーターの育成を行っています。

初代エコムーブ号を導入した2001（平成13）年度から「動く環境教室」を開始し、2003（平成15）年度から環境学習サポーターが講師を務めており、2021（令和3）年度は45名の方を環境学習サポーターとして登録しています。

表2-2-4-2 環境学習サポーターの人数（単位：人）

年度	H29	H30	R元	R2	R3
人数	51	49	55	54	45

3 ぐんま環境学校（エコカレッジ）の推進

【環境政策課】

環境学習や地域の環境活動に自ら進んで取り組むことができる人材を養成するため、環境問題に関連する幅広い分野のカリキュラムによる「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」を実施しています。

2021（令和3）年度は、6月から12月にかけて講義やワークショップ、フィールドワークを実施しました。受講者は、SDGsや気候変動、環境学習、「ぐんま5つのゼロ宣言」、廃棄物対策などに関する講義や、森林ボランティア体験会を通して、知識を深めるとともに今後の活動への意欲を新たにしました。

修了者は、原則として群馬県環境アドバイザーに登録されるとともに、「動く環境教室」の環境学習サポーターとして活躍している方もいます。

2022（令和4）年度も事業を継続し、必要に応じオンライン講座を併用するなど新型コロナウイルス感染症の感染防止に配慮した上で、環境活動に自ら進んで実践できる人材を育成していきます。



表2-2-4-3 修了者数の推移（単位：人）

年度	H29	H30	R元	R2	R3
修了者数	15	26	22	0	15

（注）2020（令和2）年度は、37人の受講者がいましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で講義を変更や中止したため、修了証を交付しませんでした。



講義の様子

4 環境アドバイザーへの登録、活動支援

【環境政策課】

環境保全活動の地域リーダーとして活躍する人材の育成・支援のため、1992（平成4）年度から群馬県環境アドバイザー制度を設けており、2021（令和3）年度末現在306名の環境アドバイザーが県に登録し活躍しています。

【環境アドバイザーの活動概要】

環境ボランティアとして、環境美化活動、地球温暖化対策、ごみの減量や再生可能エネルギー等、様々なテーマで活動しています。

1999（平成11）年度から環境ボランティアに委託している「地域環境学習推進事業」も、主に

環境アドバイザーが企画・立案・実施をしています。

また、環境アドバイザー相互のネットワーク作りのため、1997（平成9）年度に「群馬県環境アドバイザー連絡協議会」を設置しました。役員会・幹事会を随時開催し、重点活動内容について協議するとともに、会報「グリーンニュース」の発行、専門部会・委員会（ごみ問題、温暖化・エネルギー、自然環境、広報委員会）の運営、地域ごとに活動する地域部会など「行動する環境アドバイザー」をスローガンに専門性を伸ばしながら、

アドバイザー同士のつながりを意識した活動に取り組んでいます。

2021（令和3）年度には、群馬県と共催で環境フォーラム「今日から始めるSDGs～環境編～」を開催しました。フォーラムではアンカンミンカン（吉本興業所属・群馬住みます芸人）の富所哲

平さんを迎え、私たちがすぐに取り組める環境活動を学びました。

表2-2-4-4 群馬県環境アドバイザー登録者数の推移（単位：人）

年度	H29	H30	R元	R2	R3
登録者数	326	248	280	297	306

5 こどもエコクラブへの支援 【環境政策課】

こどもエコクラブは、幼児から高校生まで誰でも参加できる環境活動のクラブです。一人以上の子どもと、子どもたちをサポートする一人以上の大人でクラブをつくることができ、県がこのクラブの活動を支援しています。

1995（平成7）年から環境省のバックアップのもと全国で取り組まれており、2011（平成23）年度から公益財団法人日本環境協会が運営し、毎年全国大会も開催されています。群馬県では1996（平成8）年からこどもエコクラブが結成されています。2021（令和3）年度の登録状況及び事業状況は次のとおりです。

ウ 壁新聞の全国コンクールへの応募

高崎イオンチアーズクラブ、前橋市児童文化センター環境冒険隊及び太田イオンチアーズクラブが作成した壁新聞を、2021年度全国こどもエコクラブ「全国エコ活コンクール」の壁新聞部門に応募しました。

表2-2-4-5 群馬県内のこどもエコクラブの変遷

年度	H29	H30	R元	R2	R3
クラブ数	45	39	52	44	41
メンバー数	1,300	1,353	1,221	1,003	762

2021（令和3）年度の登録状況

- クラブ数 41クラブ
- 会員数 762名
- サポーター 153名

ア 群馬県こどもエコクラブ学習会

新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため学習会は中止となりましたが、学習会の準備のために行ったサポーター研修会では、各クラブの活動の活性化及びサポーター同士や県事務局との情報交換ができました。

サポーター研修会：

2021（令和3）年7月28日
県立北毛青少年自然の家



交流会の様子

イ 群馬県こどもエコクラブ交流会

こどもエコクラブ相互の交流を図る目的で、交流会を実施しました。交流会では、各クラブによる活動発表、壁新聞（団体）の掲示、科学工作教室を行いました。

交流会：2022（令和4）年1月15日
前橋市児童文化センター



高崎イオンチアーズクラブの壁新聞

6 ぐんま緑の県民基金事業（森林環境教育指導者養成） 【森林保全課】

自然の解説者である「緑のインタープリター」を養成し、森林や緑とふれあう様々な自然体験活動を通して人間生活や環境と森林の関係について理解を深め、緑豊かな郷土づくりを推進します。

養成した緑のインタープリターは、小・中学生を対象にしたフォレストリースクールや緑の少年団育成事業、ぐんま緑の県民基金事業の市町村提案型事業、森林観察会・自然講座などの森林環境教育の場で活動しています。



緑のインタープリター養成講座

7 小・中学生のためのフォレストリースクール 【森林保全課】

小・中学校での講義や体験活動等を通して、森林や緑化の重要性を認識し、森林保全や環境保護への意識を高めるため、県内各地で実施しています。近隣の里山の自然観察や林業体験、校庭の木々を生かしたネイチャーゲームやクラフト等を実施するために講師を派遣して、学校の授業を支援しています。

また、夏休み中に赤城ふれあいの森において、「夏の森林教室」を実施し、児童と引率の教員に、自然観察や「ツリーイング」を体験してもらい、森林や林業について幅広く学ぶ場を提供しました。



フォレストリースクール

表2-2-4-6 フォレストリースクール参加者数（単位：人）

年度	H29	H30	R元	R2	R3
参加者	2,807	2,805	2,800	1,407	2,086

8 緑の少年団育成 【森林保全課】

緑の少年団は、緑に親しみ緑を守り育てるなどの活動を通して、自然を愛し人や社会を愛する心豊かな人間に育てることを目的に、県内の小学校を中心に組織された団体で、現在314団体、約6万人の子どもたちが活動しています。

学校林の整備や森林の学習会、地域の施設へのプランターの寄贈や清掃活動等、学校や地域の実態に応じて様々な活動が展開されています。県では広くこの活動を支援し、森林環境教育を推進しています。



緑の少年団活動

9 憩の森・森林学習センターの運営 【森林保全課】

森林の持つ公益性や多面的機能に対する県民の関心、森林や環境を大切にする意識を高めるため、憩の森・森林学習センターにおいて、子どもから大人まで幅広い年代を対象にしたイベントやNPO法人等への活動フィールドの提供、指導者養成のための研修会などを年間を通して開催し、森林環境教育を推進しています。

表2-2-4-7 憩の森・森林学習センター利用者数（単位：人）

年度	H29	H30	R元	R2	R3
利用者数	12,517	12,442	12,183	7,804	8,171

10 緑化センターの運営 【森林保全課】

県の総合的な緑化推進の拠点として、緑化思想の普及啓発、緑化技術の指導、森林環境教育等を実施するとともに、市町村及び緑化関係業界等に対し緑化情報の提供や技術支援を実施しています。

また、平野部にあることから、平地林保全対策の拠点として、近隣にある平地林を管理するとともに平地林に関する情報交換の場にもなっています。

(1) 緑化関係講座の開催状況

2021（令和3）年度は、県民等を対象とした緑化講座を10回、小学生等を対象とした森林環境教育としての森林楽習講座を8回開催しました。

また、例年5月4日には、「みどりの日」の趣旨を普及・啓発するため、みどりの集いを開催していますが、2021（令和3）年度は新型コロナウイルス感染症の感染防止のため中止しました。講座等の受講者数は表2-2-4-8のとおりです。

表2-2-4-8 緑化関係講座等の受講者数（単位：人）

講座名	緑化講座	森林楽習講座	その他
受講者数	208	285	0

(2) 来園者数の推移

保健休養の場を提供するため樹木見本園、庭園見本園等を整備しており、年間およそ3万3千人の来園者があります。来園者数の推移は表2-2-4-9のとおりです。

表2-2-4-9 緑化センター来園者数（単位：人）

年度	H30	R元	R2	R3
来園者数	35,155	34,633	31,246	29,517



緑化講座の様子

11 環境教育に係る教科等の優れた実践事例の蓄積と普及 【(教)義務教育課】

(1) 環境教育の実践事例の蓄積

各学校で環境教育の充実を図るためには、各教科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間及び特別活動等それぞれの特質に応じて、児童生徒、学校、地域の実態を踏まえながら環境に関する学習が行われるようにすることが重要です。

そこで県教育委員会では、特に小・中学校において、系統的な取組ができるよう、環境教育全体計画の作成、見直しをお願いしています。

また、県内の環境教育の特色ある取組を広く紹介するため、環境教育実践事例集「みんなの環境

わたしたちの実践」を毎年2月に作成し、県総合教育センターのWebページに掲載しています。この実践事例集では、小、中、高等学校の優れた取組を1校ずつ紹介しています。

(2) 専門的な知識と指導力を備えた教員を養成する環境教育研修

今日、環境問題を解決し、持続可能な社会を構築していくためには、子どもたちの環境に対する意識を高め、一人一人が環境に配慮した行動をとれるようにしていくことが重要です。

そのため、県教育委員会では、国が主催する環境教育に関わる研修等の紹介や、総合教育センターにおける研修講座の実施を通して、環境教育に

関する専門的な知識と児童生徒への指導力を備えた教員を養成し、各学校で環境教育・環境学習を普及・推進できるようにしています。

12 教員向け研修講座（環境教育研修講座）の実施 【(教)総合教育センター】

県では、各学校で環境教育を効果的に推進できる教員を養成するため、全校種の教員を対象に「見る・触れる・体験する環境教育研修講座」を実施しています。2021（令和3）年度は、「赤谷の森」自然観察会と題して、8月に沼田市鍛冶町の「赤谷森林ふれあい推進センター」を主会場に開催しました。赤谷の森は、群馬県みなかみ町北部、新潟県との県境に広がる、約1万ヘクタールの国有林です。今年度は7名が参加し、「赤谷プロジェクト」を通して、森林の生物多様性を保全・復元するために必要となる自然林の割合や人工林が増加した経緯について理解を深めました。また、実際に小出俣植生試験地を観察することによって、森林と林業の関わりの重要性について学習しました。

イヌワシ狩場の観察（図1）では、薪炭林の利用減少により適切な間伐が行われなため、生物多様性の指標種であるイヌワシの狩場となる「開けた場所」が失われている現状を目の当たりにして、人と自然との関わりが、生物多様性の維持には重要であることが実感できました。また、鹿の箱罠の観察（図2）では、鹿の急激な生息数増加による植生への影響や、鹿のGPS発信器による行動把握調査の重要性についても理解を深めることができました。

このように、体験型の研修において、広い視点で環境教育を捉えるため、見学・分析・体験という形でのバランスのよい展開に留意しながら、児童生徒に実体験を伴った環境学習を実践するための指導力の向上を図っています。

【研修の概要】

見る・触れる・体験する環境教育研修講座

日 時：2021（令和3）年8月3日（火）
場 所：赤谷森林ふれあい推進センター
赤谷の森
内 容：「赤谷の森」自然観察会
講義「三国山地、赤谷川・生物多様性復元計画について」
実習「赤谷の森現地視察」

講 師 農林水産省林野庁関東森林管理局
赤谷森林ふれあい推進センター
所 長 佐藤 健司
自然再生指導官 玉井 宏
自然再生指導官 中園 昭博
主 事 伊藤 彰伸



図1 イヌワシ狩場の観察の様子



図2 鹿の箱罠の観察の様子

【関係業務】

自然・歴史・文化遺産研修 （小・中学校初任者研修）

里山の自然環境のすばらしさを体感するとともに、児童生徒を引率し、環境学習をする上での教材としての知識を習得します。

日 時：2021（令和3）年7月27日（火）
場 所：県立ぐんま昆虫の森
内 容：「昆虫の森体験研修」

コラム 環境SDGsファシリテーター

1 事業概要

2019（令和元）年12月に宣言した「ぐんま5つのゼロ宣言」の実現に向け、県民や企業等幅広い方々に環境意識の醸成と、地域環境課題の解決に向けた行動を促進するため、「環境SDGsファシリテーター」を養成し、県民や企業等に波及させる事業を行います。

2 事業展開

＜STEP1＞－ファシリテーター養成－

地域のリーダー的な役割を担う方や、群馬県に縁のある著名人等を「環境SDGsファシリテーター」として養成する研修を開催します。

養成研修では、SDGsに関する専門性の高い講座やカードゲームを通して、SDGsの理念の習得を図ります。

そのほかにも「ぐんま5つのゼロ宣言」や「群馬県環境基本計画2021-2030」など群馬県が取り組む環境行政分野についての知識の習得も図ります。

＜STEP2＞－イベント等によるSDGs講座－

ファシリテーターは、様々な機会を捉えてSDGs講座を実施するほか、県民が実施する地域・団体のイベントにおいてSDGs講師として幅広く活動することで、県民や企業の環境意識の醸成を図ります。

＜STEP3＞－県民等への波及－

翌年度以降もファシリテーターによる自主的な活動を通じて、多くの県民の方々へSDGs等を波及させ、地域環境課題の解決に向けた行動の促進が期待されます。



持続可能な開発目標 (SDGs)

第2項 環境情報の提供と共有化

1 試験調査研究の推進、成果の公表 【衛生環境研究所】

衛生環境研究所では、感染症・食中毒などの衛生・医療及び水・大気などの環境保全に関する調査・研究を実施しています。

このうち環境分野では、従来の自然科学を中心とした調査・研究に加え、社会学的なアプローチ

にも力を入れ、研究を進めています。

2021（令和3）年度に実施した主な調査研究のテーマは、表2-2-4-10のとおりです。これらの一部は環境省や文部科学省の競争的研究資金を獲得し、実施した研究です。

表2-2-4-10 衛生環境研究所における主な調査研究

	調査研究テーマ	内容
1	河川中のマイクロプラスチックの調査方法の確立とその展開	世界的にも確立されていないマイクロプラスチック（MP）の調査方法について、県内河川における調査方法を確立すること、また、確立した調査方法を用いて県内河川の実態調査を行い、得られたデータをもとに、MP削減のための環境教育プログラムを開発することを目的とした研究を行っている。2021（令和3）年度までの研究で調査方法を確立し、利根川のMPについて調査を行ったところ、下流ほどMP数密度（1㎡当たりの個数）が大きくなる等の結果が得られた。
2	環境DNA技術を応用した生物学的水質判定法の発展	現在捕獲調査で実施されている生物学的水質判定法に環境DNA技術を取り入れ、より簡便かつ環境に優しい手法とするため碓氷川において基礎研究を開始した。捕獲調査と河川水試料によるDNA分析を併行して実施し、環境DNA分析に適した試料採取時期や生物種を把握することができた。また、生息生物DNAの定量分析を試行したことにより、手法整備に向けた知見を得ることができた。
3	汚濁負荷量解析モデルの改良のための荒砥川流域の詳細調査	各種汚濁負荷発生源データを整理し、流域ごとに流出汚濁負荷量を見積もり、現況水質の再現を行った。概ね良好な再現はできたが、一部流域では推計値と実測値に乖離があった。今後この解析モデルを用いて将来の水質予測を行うに当たり、解析モデルの精度を高めることを目的として、特に乖離が大きかった荒砥川流域について、その原因を明らかにするために詳細調査を行った。
4	災害時等の緊急調査を想定したGC/MSによる化学物質の網羅的簡易迅速測定法の開発 (共同研究機関：国立環境研究所及び地方環境研究所)	事故・災害時において初動時スクリーニングに有効な、GC/MSによる全自動同定定量データベースシステム（AIQS-DB）の構築を目的とした共同研究に参加している。機器やソフトウェアの操作方法を習得し、水質汚濁事故時等に活用できるよう体制を整えた。
5	光化学オキシダント及びPM2.5汚染の地域的・気象的要因の解明 (共同研究機関：国立環境研究所及び地方環境研究所)	光化学オキシダント（Ox）の現状把握とOx原因物質に関する基礎的知見の取得、PM2.5汚染解明などを目的に調査を行った。全国の大気汚染常時監視データを集約し、Ox濃度等の経年変化を解析した結果、年平均では全国的に増加傾向であるが、季節別にみると西日本は春夏ともに増加、東日本では春は増加、夏は減少と季節・地域によって変化傾向が異なることが明らかとなった。また参画する地環研とともにOxの原因物質である揮発性有機化合物（VOC）やPM2.5について大気共同観測を実施した。VOC組成の地域特性や昼夜別挙動を把握することができた。
6	群馬県における光化学オキシダント汚染と揮発性有機化合物の実態の把握	近年の光化学オキシダント（Ox）汚染要因の解明と今後の改善に向けた対策へ資する基礎的な知見を得ることを目的とし、Ox濃度変化に係るデータ解析、及び県内のOx生成に寄与する揮発性有機化合物（VOC）調査を実施した。Oxデータ解析においては気象条件や原因物質濃度を考慮して解析し、近年のOx濃度の変化傾向を明らかにした。VOC調査においては、県内地点間のVOC濃度や組成の差異、Ox生成の寄与が大きい成分、日内のVOC挙動等を明らかにした。

7	教科と連環した新しいアクティブラーニング型環境教育の確立と教育効果測定指標の開発 <科研費基盤C> (共同研究機関：高崎経済大学)	環境教育の特長である『アクティブラーニングとの親和性の高さ』と『教科横断性』に着眼し、教科教育と連環したアクティブラーニング型・環境教育モデルの確立を目的として研究を進めてきた。小学校4年生(約100名)を対象にピオトープを活用した環境学習会を3回(夏、秋、冬)実施し、これまでの研究で確立してきた『テキストマイニング分析』を用いて学習効果の可視化を試みた。これらの学習会を通して、学校内での教科教育と、学校外でのアクティブラーニングの融合により、より深い学びを喚起することが可能であることがわかった。
8	ごみ減量のための市民の自発的な2R行動促進施策の全国調査と実証分析による水平展開 <科研費若手>	人口5万人以上の全国540の自治体に対してWebアンケート調査を行い、405自治体からの回答(回収率75%)を得て2R行動促進施策の実施状況を明らかにした。いずれか一つでも施策を実施していると回答したのは395自治体あり、住民介入方法別の割合で多かったのは回覧板や広報等を利用した一方向の情報提供型であること等を把握した。

2 群馬県環境サポートセンターの運営 【環境政策課】

小中学校や地域などにおける環境学習や環境活動を総合的に支援するため、2003(平成15)年度に群馬県環境サポートセンターを開設しました。

センターでは、環境学習や活動に関する質問や相談の受付、実験器具等の貸出し、情報提供・発信、動く環境教室の運営、環境アドバイザーや子どもエコクラブの活動支援などを行っています。

- 〔概要〕
- ・設置場所 群馬県環境政策課内
 - ・設備等 移動環境学習車(エコムーブ号)、実験器具等
 - ・情報発信 ホームページ(ECOぐんま)、Twitter(@ECO_gunma)

〔2021(令和3)年度の利用状況〕

・質問・相談件数	988件
・動く環境教室利用	45件

3 森林ボランティア等推進 【森林保全課】

森林環境への関心が高まるなか、多くの方に森林にふれる楽しさと森林整備の重要性を知ってもらうため、県民参加による森づくりを進めています。

県では森林ボランティア活動を推進し一体的な支援を行う拠点として、2014(平成26)年10月に「森林ボランティア支援センター」を開設し、作業時の安全対策・器具の取扱い講習会等の開催、森林整備作業器具の貸出しなどを行っています。

また、企業ボランティアでは、2021(令和3)年度末時点で、「企業参加の森林づくり」で30団体(31協定)、「県有林パートナー事業」で10団体が森林整備に取り組んでいます。

表2-2-4-12 企業ボランティア協定締結数

年度	H29	H30	R元	R2	R3
締結数	39	40	41	37	41



安全対策講習会

表2-2-4-11 森林ボランティア団体会員数 (単位：人)

年度	H29	H30	R元	R2	R3
会員数	4,927	5,318	4,647	6,036	6,060

4 ぐんま緑の県民基金事業（森林ボランティア支援） 【森林保全課】

県では森林を社会全体で支える県民意識を醸成するため、憩の森・森林学習センターに森林ボランティアの活動拠点として「森林ボランティア支援センター」を設置し、ヘルメットやノコギリなどの森林整備作業器具の貸出しや安全講習会の開催（5回開催、合計80人参加）、専用ホームページ「モリノワ」による情報の収集・発信、「森林ボランティア体験会」の開催（2回開催、合計28人参加）など、森林ボランティア活動に一体的なサポートを行っています。



森林ボランティア体験会

5 こども環境白書の作成 【環境政策課】

本県の豊かな自然環境を守り、確実に将来に引き継いでいくためには、次代を担う子どもたちへの環境学習が重要であることから、2004（平成16）年度から環境白書の普及版として、こども環境白書を隔年で作成し、県内小中学校などの教育機関を中心に配布しています。

2021（令和3）年度に作成した最新版では、群馬県の環境などをデータやイラストを使ってわかりやすく整理するとともに、学校での環境学習の副読本として活用してもらうため、主に小学校4年生から6年生の学習指導要領との整合に配慮した内容となっています。



ぐんまこども環境白書

6 環境情報ホームページ（ECOぐんま）の運用 【環境政策課】

県では、環境に対する理解を深めてもらうことを目的に、2012（平成24）年3月から群馬県環境情報ホームページ「ECOぐんま」を開設し、県内の環境に関する情報を発信しています。ホームページ内では、環境についてのイベント情報や、家庭での二酸化炭素排出量診断、EV充電マップ等の様々なコンテンツを見ることができます。2019（令和元）年からは「ECOぐんま」のTwitterを開設し、情報を拡散しています。

「ECOぐんま」ホームページアドレス

<http://www.ecogunma.jp/>

「ECOぐんま」Twitterアカウント

@ECO_gunma



ECOぐんまホームページ

(1) 掲載コンテンツとホームページ閲覧数

2021（令和3）年度は、環境に関する活動を実施している団体の紹介、県主催のイベントの告知や環境学習資料の掲載などを行いました。また、「動く環境教室」の授業内容の動画を公開しました。環境アドバイザーに対して会議の情報や会報も配信しています。本ホームページの閲覧数の推移は表2-2-4-13のとおりです。

表2-2-4-13 「ECOぐんま」ホームページ閲覧数

年度	H29	H30	R元	R2	R3
閲覧数	43,822	46,740	57,342	76,470	67,922



ECOぐんま Twitter



ぐんま緑の県民税について

森林は、水源の涵養^{かん}や国土の保全など、全ての県民に様々な恩恵をもたらす県民共有の財産です。そのため、受益者である県民全体で森林整備等に要する費用を負担することにより、森林環境を維持保全し、良好な状態で次の世代に引き継ぐことを目的として、2014（平成26）年度に「ぐんま緑の県民税」を導入しました。ぐんま緑の県民税を活用し、水源地域等の森林整備事業や市町村提案型事業に取り組んでいます。



地元団体による刈払い作業（長野原町）

水源地域等の森林整備事業は、条件不利地や簡易水道取水口の上流、松くい虫等の被害地の森林を対象とした整備を行っています。

これらの森林の多くは、地形的な条件等により林業経営が成り立たず手入れが行われていないため、下層植生に乏しく、土砂流出防備や水源涵養^{かん}などの公益的機能が十分に発揮されないことが課題になっています。

そのため、豊かな水を育み、災害に強い森林づくりに向けて2014（平成26）年度から2021（令和3）年度までに4,919haの間伐等の整備を実施しました。



条件不利地における森林整備（甘楽町）

市町村提案型事業では、里山・平地林等の森林環境を改善し、安全・安心な生活環境を創造することを目的としており、地域のボランティア団体やNPO、自治体等の活動を支援するため、市町村に対して補助金を交付しています。

当事業は、荒廃した里山・平地林の整備のほか、貴重な自然環境の保護・保全、森林環境教育・普及啓発など、山地に限らず県内全市町村において幅広い事業に活用されています。

また、地域の課題に対し、ぐんま緑の県民税の趣旨、目標と照らし合わせて適切と認められたものは、独自提案型事業として支援しています。2021（令和3）年度は、クビアカツヤカミキリの被害対策や日照改善のための森林伐採など19事業を行いました。



粉碎機を使用した竹林整備（太田市）

ぐんま緑の県民税を活用した事業の実績評価や効果検証は、有識者等で構成する「ぐんま緑の県民税評価検証委員会」で行われています。



評価検証委員による現地視察（渋川市）